

コートジボアール・アジュクル人の 重層的帰属意識

——ふたつのサッカー暴動から——

茨 木 透*

1 はじめに

独立後のアフリカ諸国の課題のひとつは、国家形成をしつつ国民を形成することであった。この課題と対立しこれを阻害するものとして考えられてきたのが、「部族主義(tribalism)」という語でもって批難をこめて呼ばれてきた民族への帰属である。部族的なものは警戒され回避されてきた。コートジボアールでは、センサスの民族統計がデータブックに掲載されていなかったり⁽¹⁾、新聞などではしばしば民族集団の呼称を直接使うことを避けて地域名を隠喩として用いるなどがみられる⁽²⁾。

そのような障害にもかかわらず国民意識はこの国では独立後40年を経た今日ではおおいに浸透してきた。このことは1995年および2000年の2回の大統領選挙を機になされた、大統領への立候補資格をめぐるコートジボアール人性(イボアリテ Ivoirité)論争に明らかである。そのなかで本年7月に国民投票によって承認された候補要件は非常に厳しいものとなった。大統領候補となるには候補者自身がコートジボアール国民であるだけでなく、その両親のふたりともがコートジボアール国籍をもっている必要があると決まった。これにより国外からの移入民だけではなく、一方の親が移入民である二世も本人の国籍にはかかわらず候補となることはできないことになった。

このような国民意識の浸透は、では他の既存の帰属意識の弱体化ないし消失をともなっているのであろうか。帰属意識について西川は「個人は、国家、民族、等々といった単一のものだけに同化しているのではなく、いくつかのレベルでさまざまな対象に同一化するものである」[西川1995:192]と指摘している。西川はとくに言及していないが、複数の帰属が編成原理が異なる集団に別個に生じるのは当然であるだろう。たとえば血縁集団と地縁集団とにそれぞれ帰属意識をもつことはごく普通に考えられることである。問題となるのは原理は同じだが異なったレベルの集団にたいして複数の帰属意識、すなわち重層的帰属意識が生じるかである。さらに、この重層的帰属の場合に、それぞれの帰属意識の強度はどの程度なのかという問題がある。

本論では地域に根ざすと考えられているものに限って重層的帰属意識について検討する。村、地方、国家⁽³⁾などのさまざまな広がり地域集団へひとり人間が帰属意識をもっているのかどうか、それがどの程度の強度のものであるのかを、サッカーをめぐるふたつの事件とその報道からみていきたい⁽⁴⁾。具体的には1993年から94年にかけておこった国家レベルと村レベルとふたつのサッカー試合における暴動を主な材料として、アジュクルの人びとの帰属意識について考察していく。

これまでサッカーをめぐるのは、ナショナリズムとの関係についてはたとえば今福[1997]や後

* 地域社会講座(社会人類学)

藤 [1995] が考察している。またサッカーと部族主義についてケニアの例を取りあげたものに坂本 [1994] が、スポーツ社会学の立場からサッカーの観客を論じたものにリーヴァー [1996] がある。

本論で取りあげるアジュクル人は、西アフリカ・コートジボアールの経済首都アビジャンから西へおよそ50キロメートルに位置する町ダブ (Dabou) を郡庁所在地とするダブ郡の30あまりの村に居住する。その人口は約10万人といわれる。またダブ郡にはアジュクル人だけではなく国内外からの移入民も数万人居住している。

2 村人の帰属意識

私の調査地であるアジュクル人の村 (A村としておく) の人びとが、どのような地縁集団に帰属していると感じているのかという問題は、直接的には判断の難しい問題である。これまでの調査の中での人びととの日常会話などから考えると、村人にとって地理的・空間的な領域をもつ集団として以下のものがあげられるのではないかと考える。

まず、日常的に対面的接触がおこなわれる村が第一にあげられるだろう。この村は上・中・下という三地区に分かれていて、各人はそのどれかに分属していることで村の一員であるということになっている。村を越えたレベルでは、まずあげられるのはアジュクルという民族集団に属していることである。アジュクルの居住領域は行政上の区画であるダブ郡とほぼ重なる⁽⁶⁾。これは同時に言語共同体であり文化共同体ともいえる。第三に、支族 (confederation) があげられる。歴史的にアジュクルの社会編成はブブリ (Boubouri) とディブリム (Dibrimou) のふたつの支族にわかれ対立しあっていた。それぞれの支族はほぼダブ郡の西半分と東半分に相当する。A村はブブリ支族に属している。第四は村連合 (tribu) である。それぞれの支族はいくつかの村の連合からなり、A村はオボル (Oborou) 連合に属している。この村連合が単位となっておこなわれる儀礼もつい最近まで存在していた。人口規模からするとこの村連合までがどうか対面的接触が可能で集団といえる。

これらの4つの「伝統的」な共同体への帰属意識とともに、新たな共同体すなわちコートジボアールという国家への帰属、自分がコートジボアール人であるという国民意識も、人びとのあいだに確実に見いだすことができる。のちに詳しく述べるが、ブルキナファソやマリ、ガーナなどの他国出身の移入民たちが村の外に居住していることも、コートジボアール人意識の形成におおきな影響を及ぼしたものと思われる。

このコートジボアール人意識以外にも、新たな帰属意識がみられる。1990年代中頃より声高に叫ばれることが目立ちだしたコートジボアールの南部と北部という分けかたのどちらに属するのか、南部人か北部人かという意識も近年相当の浸透をみる。アジュクルの人びとはキリスト教徒が中心で開発の進んだ豊かな南部地域に属し、イスラム教徒が中心で中央政治からは見はなされてきた貧しい北部地域と対立することになる [Camacho 1998:26-27]。

他方、国家を超えたレベルをみると「われわれアフリカ人」という意識が村人のなかにもみられる [勝俣 1998:71-72]。このアフリカ人意識についてすこし詳しくみておく。これは人種概念である「黒人」の言いかえとも考えられるからだ。アメリカ合衆国で「黒人」という語を差別的だとみなし「アフロ・アメリカン」に言いかえられているのはその例である。コートジボアールでも、「黒人」と自己言及することはみられなくなり、非黒人がこの語を使用することも表立ってはないといえる。もちろんこれらは公的レベルの使用と自己言及および他者にたいする呼びかけの場合に

限られ、一般的な分類名称としては存続している。他方、「黒人」の反対概念にあたる「白人」は、アジア人も含めた非黒人にたいしアフリカ人の側から呼びかけとしても使用されつづけている。また「アフリカ人」の範疇にはサハラ以南のアフリカ人だけではなくコートジボアールで一般に「レバノン人」と呼ばれるアラブ系の移民も含まれ、さらに北アフリカだけではなく中東のアラブ人もおそらくこの中に入る。中東がアフリカ大陸に位置していないにもかかわらず、また人種的には白人であるにもかかわらず彼らも「アフリカ人」なのである。同時に「レバノン人」をさして「われわれの身内の白人 (notre blanc)」という表現もされ、欧米の「白人」とは異なるものとして区別されていることがわかる。これらから「アフリカ人」とはかつて白人が形成した分類である「黒人」と同義ではないといえよう。

以上のように地域に根ざす集団だけを考えても、総数100人に満たない村の中の地区という集団から数億人におよぶアフリカ人という集団まであげることができる。これらのさまざまなレベルで帰属意識形成は可能であり、また個人が帰属すると感じているのはそれらに軽重の差はあるにせよひとつと限ることはできない。

3節と4節ではここにあげたさまざまなレベルの集団から国家と村をとりあげ、それぞれのレベルで起こったサッカーをめぐる事件を事例として、それぞれへの帰属意識の強度について検討したい。

3 対ガーナ・ナショナリズム

3.1 アセック＝コトコ事件

サッカーの第29回アフリカ・クラブチーム・チャンピオンカップの準決勝は1993年10月17日、まずアセックの本拠地であるコートジボアールのアビジャンでアセック (ASEC) 対コトコ (Kotoko) の第一戦が行われ、アセックが3対1で勝利した。アセックは現在のコートジボアールの中ではおそらくもっとも人気のあるクラブ・チームである⁽⁶⁾。一方コトコは、この名称がアシャンティ (Ashanti) のシンボルのひとつである「ハリネズミ」を意味し⁽⁷⁾、チームの本拠地がかつてのアシャンティ王国の王都クマシ (Kumasi) であることからわかるように、ガーナ最大のエスニック・グループであるアシャンティを代表するクラブ・チームである。アセック勝利の後の第二戦は二週間後の10月31日 (日曜日)、コトコの本拠地クマシでおこなわれた。試合はコトコが2対0で勝利し決勝へ進出することとなった。

「アセック＝コトコ事件」として今も記憶されている事件は、この第二試合の応援にコートジボアールからクマシまで大挙してくりだしたアセックのサポーターが、ガーナ側から暴行や嫌がらせを受けたことに始まる。コートジボアールのマスコミ報道によると、人びとを乗せたバスが国境を越えたところから投石や暴行などをガーナ人から受けた。また、クマシでの試合当日にもアセックのサポーターは、競技場の入場チケットをもっていたにもかかわらず、ガーナ側の妨害にあって最後まで競技場のなかに入れなかった。そして10月31日から11月1日にかけてコートジボアールに戻ったたくさんのサポーターたちは負傷した姿で帰ってきたのである。

この日曜日のクマシでの出来事がコートジボアールの新聞に報道されたのは、月曜日には間に合わなかったようで翌々日の2日火曜日からである。だがたくさんの人間がガーナでやられたという

ニュースはそれ以前にラジオもしくは噂によって伝わっていたのだろう。すでにガーナ人にたいする「復讐」は新聞がクマシの事件を報道する2日より前に始まっていたようである。

このことは新聞の記事から確認できる。11月3日付の政府系の朝刊紙、『フラテルニテ・マタン』(*Fraternité Matin*, 以下FMと略す)には、ラジオがアビジャンの騒動を伝えているという記事が掲載されている。それによれば、アビジャンの民間ラジオ局「アフリカ・ニューメロ・アン (Africa N°1)」が2日朝のニュースでこの騒ぎについて、トラブルで50人の死者がでていと報道している。新聞の記事はこのラジオ報道には誇張があると非難していた。これにたいしてラジオ局も反論し、その反論ものちに同じFMに掲載された。

街のあちこちで蛮行や略奪があり、外国人は本当に暴力を受けて死ぬまで殴られたのである。トレッシュヴィル⁽⁸⁾の16番通りでは、ひとりの女性が死んだのを目の前で目撃したし、警察署にはたくさんの外国人が避難と保護を求めてきていたのである⁽⁹⁾。

翌3日、FMはクマシの事件の続報はしているがアビジャンで起きている騒動についてまったく沈黙を守った。だが、新聞の報道はないものの実際の事態は相当に深刻だったのだろう。同日、コートジボアール政府はFMと同じ新聞社が発行する夕刊紙『イボアールソワール』(*IVOIRE' SOIR*, 以下ISと略す)紙上で、おこっている事件にかんして「鎮静の呼びかけ」との見出しをつけた次のような声明を発表した。通常には政府発表を一手に掲載するはずのFMではなく大衆紙であるISに声明が掲載されたこと自体が、事件の緊急性とともな異常性を感じさせる。多少長くなるが、記事全文を引用しておこう。

ガーナからの情報によれば、アセックとコトコの第2戦に際してもめごとがおこった模様である。

コートジボアールはつねに人びとを温かく受け入れてきた土地であり、コートジボアール当局は領土内に住む外国人のコミュニティーの生命と財産の保護をつねに保証してきた。

コートジボアールにはおよそ400万人の外国人が定住しており、ガーナ人のおおきな在留グループがあることはこのことの雄弁なしるしである。したがって、アビジャンでの第一戦がおこなわれた期間中、コートジボアール政府はガーナの代表団やコトコの選手、チームの協賛者、そして試合を観に出向いてきたガーナ人サポーターの安全を保証するために、あらゆる適切な措置をとってきた。

この思いがけないもめごとについての説明を得ようと政府はガーナ当局に接触中であり、住民のみなさんには平静を保ちガーナ人コミュニティーに対して決して報復をしないよう要請する⁽¹⁰⁾。

事態はこのように政府声明としてガーナ人にたいする報復の可能性に直接言及して、その沈静化をはからなければならぬまでに至っていたといえるだろう。4日にはこの事件はコートジボアール、ガーナ両国の外交問題にまで発展した。ガーナの外務大臣が急遽アビジャンに訪れ、コートジボアールの首相および外務大臣と会談している⁽¹¹⁾。

事件の規模のおおきさは5日の「仮集計」としての発表からも想像できる。それによれば、死者は23人で、内コートジボアール人が6人、ガーナ人が13人、国籍不明が4人にのぼっている。また

病院に担ぎ込まれたのはコートジボアール人が20人、外国人が53人であったと伝えられた⁽¹²⁾。少なくとも20名以上の死者がでたこの事件は、ガーナ人だけではなくコートジボアール在住の外国籍の人びとすべてにとって「決して忘れることのできない」事件として記憶されることになる。

このような外国人排斥は、歴史的には独立前の1958年にダホメ（現ベナン）人やトーゴ人を国外に追放したことがあったが、それ以来目立った動きはなかった〔原口1992:135〕。しかも独立前の国民意識の発現は、「経済発展の果実を、地元民の名で確保しようとする経済的利害の水準にとどまる意識であった」〔原口1992:139〕。当時ダホメ人がフランス領西アフリカのなかで重用され要職を占めていたことが理由での排斥と考えるとよいだろう。A村にもこのダホメ人の追放で近くの会社の空いたポストに就いた人が何人か存在する。

かつてのダホメ人が相対的に有利な地位あったのと比べ、今日のガーナ人がコートジボアール人にとって羨望や嫉妬の対象にあるとはとてもいえない。ガーナ人はむしろコートジボアール人に雇用されていたり、コートジボアール人のやりたがらない労働に従事しているのである。そこには経済的なものにしろその他のものにしろ直接的な利害の対立はみいだせない⁽¹³⁾。むしろナショナリズムがもっとも発現しやすいスポーツの試合においては、利害とは無関係にそれが剣さだしの形で現れたといえるのではないだろうか。

ガーナのクマシでのアセック対コトコの試合に伴った騒動は、サッカーの試合が開催されたわけではないアビジャンにおいて反ガーナ人意識をともなった復讐となり、多数の死者を出すこととなった。このようなサッカーにともなう騒動としてはフーリガンの問題がよく知られている〔ビュフォード1994〕。しかしアセック＝コトコ事件はフーリガンの事件とはいえない。実際に観戦にいった人というよりもむしろ観戦にいかなかった人もふくめた人びとの全体が起こした事件なのである。そして、つぎに述べるように、事件はアビジャンだけではなくA村という地方の村にまでおよんでいる。また、政府は声明で事件はクマシでコートジボアール人が受けたひどいうちをたいする復讐だとしている。新聞報道もそのような論調である。だが、少なくとも20名以上の死者がでた事件がたんなる復讐でおきるのであろうか。試合を観にいったクマシでコートジボアール人が殺されたわけではないのである。これについてもA村でおこったことを調べると、それが単なる復讐ではなかった可能性がみえる。

3.2 A村での反応

アセック＝コトコ事件がおきた1993年の10月から11月にかけて、私は日本にいたので直接この事件を見聞きしたわけではない。この事件に関心をもちはじめたのは、翌年8月A村に第二回目の調査に戻ったときである。

事件について述べる前に、ここでA村について、およびA村に居住している非アジュクル人について簡単に説明しておきたい。

私が主な調査をおこなっているダブ郡A村は、郡庁のあるダブの町から約10キロメートルに位置している。人口はアジュクル人だけで300人たらず。ほかにアジュクルが住む地区のなかに移入民が数十人居住している。村にはアジュクルの住む地区のほかに、その南側に接して移住民からだけのジュラ・ブグ (*jula bugu*) と呼ばれている地区がある。そのむこうがパーム会社の労働者の暮らす社宅街で、それをこえると隣村に入る。ジュラ・ブグには200人あまりの非アジュクル人が居住しており、その構成は、国内の他地域出身者ととともに、ブルキナ人、マリ人、トーゴ人、ベナン人、

ギニア人、ニジェール人などで、さまざまな民族・国籍の人びとからなる。この中には季節的な出稼ぎ者もいるなどその人口は非常に流動性が激しい。A村のアジュクルの人々はこれらの移入民を農業労働者等として雇用する立場にあり、高齢者中心の農業経営であるゆえこれら移入民の労働力は不可欠となっている。

これらの移入民をアジュクルの人びとは原則として外国籍の人にたいしてはその国名で、同じコートジボアール人にたいしてはそのエスニック・グループ名でまず認識している。例外はブルキナファソのモシ (Mossi) およびシサラ (Sissara) の人々で、彼らは国名ではなくエスニック・グループのほうで認識されている。逆にブルキナファソ出身であれば他のエスニック・グループに属していてもモシであるとみなされる場合もある。一方で、移住者のある集団を「ガーナ人」と所属する国籍で呼び、もう一方では「モシ」のように、明らかにブルキナファソに国籍をもつ人であっても民族名が集団呼称となっている。

本論で取り上げているガーナ人も1993年以前はおもにジュラ・ブグに居住する非アジュクル集団のひとつであった。92年にはおよそ20人たらずのガーナ人コミュニティーがジュラ・ブグに形成されていた。だが、彼らは93年秋のアセック＝コトコ事件を機に村から姿を消してしまった。それ以後今日まで、ジュラ・ブグにガーナ人は戻ってきていない。

さて、アセック＝コトコ事件のときに村ではどのようなことがあったかを述べていく。2回目の調査のために村に着いてまず最初に気がついたのは、ジュラ・ブグの何軒かの家が焼けかれたまま放置されていたことである。また、しばらくするうちに、以前は小さなコミュニティーを形成していたガーナ人たちがひとりも見当たらないことも気になった。これらがどうしてなのかは、単刀直入にはなかなか聞きづらく、それとなく少しずつ聞いていったなかでわかってきたのは以下のことである。

まず、焼かれた家は以前ガーナ人が住んでいた家であることが確認できた。隣村の若者がアセック＝コトコ事件のときに襲撃しにきて、家に火をつけたという。しかし、そこに住んでいたガーナ人は、おそらく無事だろうというのだ。なぜなら、アセック＝コトコ事件がおこる前にあらかじめかれらはなんらかの騒動が起こることを予測していたのだろうか、村外に避難していて、事件の日にはすでにジュラ・ブグからは消えていたということだ。

アセック＝コトコ事件についてどのような情報を得たのかも聞いた。それによると、アビジャンで、ガーナ人がリンチにあたり瀉に放り込まれたりして殺されているという噂が流れたという。もちろんこの噂の出所や経路はわからない。だがこれと同様の話はアビジャン在住の人からも聞き取ることができた。

アビジャンで何10人かの死者がでたのと、A村のガーナ人の家が襲撃を受けたのはほぼ同時的なできごとだったことがわかった。都市においてだけではなく、そこから60キロメートルほど離れた小さな村においても、死者こそでなかったがガーナ人に対する同様の迫害が生じていたのである。

さらに、A村でわかったことは、事件が決してクマシでコートジボアールからのサポーターが暴行を受けたことにたいする復讐というような偶発的なものではなく、ガーナ人にとってはある程度前もって予測されていたものでないかということだ。おそらくこの時期にコートジボアール人のあいだになんらかの反ガーナの風潮が、都市だけでなく農村部にまで広がっていたのだろう⁽¹⁴⁾。当時、ジュラ・ブグにいたガーナ人にとってこのできごとは相当の衝撃だったのであろう。6年以上たった2000年4月現在もジュラ・ブグにはガーナ人はひとりも戻ってきていない。

4 村相互の対立

サッカーをめぐる暴動事件は、国のレベルでおこるかぎり、南米の例をあげるまでもなくたくさんあるだろう。アセック=コトコ事件も、ナショナリズムの発現であるという限りでは、それほど特異な感のするものではない。だが、サッカーにともなう騒動は村のレベルでもおきた。アジュクルの村相互のサッカーの試合において、試合の経過に不満をもった観客になかから暴動がおこり多数の重傷者が出たのである。

その事件はサッカーの試合のあった村の名前から「ヤサップ (Yassap) 事件」と呼ばれる。事件がおこったのは1994年の夏休みがほぼ終わりにちかづいた9月18日であった。アジュクルの村対抗サッカー選手権「第13回ルクアス・アップル杯 (La Coupe Loukouass Akpl⁽¹⁵⁾)」がこの休暇を利用して開催され、その決勝戦がヤサップ村のグラウンドでおこなわれた。決勝に勝ち残ったのはヤサップ村とその北隣のロプ (Lopou) 村のチームであった。

村どうしの対抗試合といえども、それへの取り組みは選手もそれをサポートする方も真剣である。アジュクルの人は子どものするサッカーは「遊び」だというのが、対抗戦のような20才代の青年が真剣にするサッカーは「遊び」などではないという。このような村対抗試合ではチームの中に数人の村出身ではない優秀な選手がいるのが「あたりまえ」である。そして選手たちは勝利すれば (額は少ないにせよ) いくらかの報奨金が出ることを当然のように期待している。これら選手を呼ぶ費用や報奨金、そのほかにはユニフォームや交通費などのすべての費用はたいていは単独の後援者が負担するので、ひとりで負担するにはは相当な額の出費をしていることになる。また選手権そのものも強力な後援者がいないと開催できにくい。このときの選手権ではロプ村出身の当時現職のスポーツ大臣であったディビ氏がそれにあたると思われる。決勝当日には大臣みずから観戦にきたほか、何人かの記者がヤサップまで取材にきていたようだ。おかげで地方でおこった事件にもかかわらず詳しい報道が残っている。

暴動は試合開始から48分後、すなわち後半に入ってまもなくロプが2点目のゴールをした瞬間に、それに不満をもった観客が一齐にグラウンドになだれこんだことに始まる。試合中におこり試合が中止となったという点ではまさにフーリガンの暴動であるといえよう。リーヴァーはフーリガンの暴動について次のように述べている。「内部に数多くの、あるいは強烈な、分裂を抱えた社会では、劇化された闘争はあまりにも真に迫っているがゆえに、見世物としては盛り上がりみせるのだが、あげくの果てには、敵意が強烈すぎてともにプレーすることができなくなるということにもなるのである」[リーヴァー 1996:230]。騒動はしばらく続き多数のけが人が出た。

負傷の規模についてはISに詳しい。それによると、重傷者は10人あまりで、アビジャンの病院に運ばれた。そのうち1人はディビ大臣のボディガードにピストルを撃たれたものからくも命を取りとめた人であったと思われる。また傷害以外にも、ロプの選手を乗せてやってきたディビ大臣所有の小型バスが焼き討ちにあい全焼した⁽¹⁶⁾。

この事件当日は私は調査のためにA村に滞在中であった。私自身はこの試合の観戦にはいかなかったが、村の青年たちの中にはこの決勝戦を観にいった者がおおくいた。そのため試合のあと興奮のさめないままの彼らに戻ってきて、ただちにこの事件の話を知ることができた。その時の話では、ピストルで撃たれた人と焼き討ちにあったバスの運転手の2名が殺されたことになっていた。

上のISの記事につけられたサブタイトルは「土地問題と魔術 (sorcellerie) が原因」となってい

る。土地問題とは、もともとふたつの村の間には土地問題で対立があり、それが誘因だということだ。だが、村と村の土地争いはこの地域では珍しいことではなく、どの村も常に隣村とのあいだで土地問題を抱えているといっても過言ではない。しかしだからといって、死傷者などでたりすることは通常はない。またもう一つの原因である魔術とは、記事の内容から、ロプが得点した1点目が魔術によるものであるとヤサップが主張していることを指している。村のなかでも「魔術を使った」という言説は他者を非難する場合にしばしば用いられる。どちらも、とくに対立感情をとくに強めるようなことがらではない。これらが10名あまり重傷者をだした事件の根本的な原因とはいえないのである。

5 おわりに

以上みてきたように、サッカーの試合をめぐるのは、国際試合であっても村対抗試合であっても暴動が起きた。国民の代表や村民の代表が闘うサッカーの試合が、代表以外の人びとの闘う場と化したのである。ふたつの事件の類似性について、ISはロプの人への取材からとして「アセック対コトコの試合を経験した人は、ヤサップで同じ光景をもういちど経験したのだ⁽¹⁷⁾」と記事中に書いている。一方は国民意識の発現であり、他方は村民意識の発現であるというようにレベルは異なるものの、暴動にいたるという点で意識の強度の面ではかわらないものがあるといえるだろう。またどちらの事件においても、原因と推定されていることとその発生した暴力のおおきさがつりあいがとれていないことも共通する。

本論で事例で取りあげたのは国家と村への帰属についてであるが、帰属の対象は国家ないし村に限られるものではないことはあらためて強調したい。同じくサッカーにかんする事例から、アフリカ人意識および部族意識についてもふれておこう。

1998年のワールドカップに出場したカメルーンは予選リーグ第3戦の対スペイン戦において、カメルーンのあげた得点がオフサイドの判定で無効とされ試合は引き分けに終わった。このことでカメルーンの予選での敗退は決定した。だがこのオフサイド判定が審判のミスジャッジといわれてもしかたのないような疑わしいものだったので、これにたいし他国のチームであるにもかかわらず自分のチームのこのことのように村人たちは怒るのである。それはおそらくカメルーンがアフリカを代表しているからであろう。アフリカの仏語圏全体をカバーするニュース週刊誌『ジュン・アフリック』(*Jeune Afrique*)もこの問題の特集で掲載した⁽¹⁸⁾。アフリカのチームの問題はその国の人だけではなく(少なくとも)仏語圏アフリカの人びとに共通の、憤りをおぼえるものであることがわかる⁽¹⁹⁾。サッカーは国民意識だけではなくアフリカという地域に所属するという意識をも発現させることを、この一件は示しているのである。

他方、コートジボアールでは顕著ではないサッカーと部族主義との結びつきについては、坂本のケニアの例の報告を参考にしたい。それによれば「ケニアでは、地方ごとにサッカー・チームを擁し、自分の出身地のチームが試合に出るとなると、出稼ぎなどで都市に出てきている人びとは、こぞって競技場へと足を運ぶことになる。ただ、切符を買って入場し観戦するというような生やさしいものではなく、競技場へ向かう乗り合いバスの中から既に戦いの火蓋は切られている。すなわち、観戦にともなう一連の行動は、まさに、出身部族のチームと相手チームをめぐる模擬戦であり、スポーツ観戦とは、固く結ばれた出身地域との絆の発露に他ならない」[坂本1994:40]のである。

このような他国の試合にたいしてのアフリカ人レベルでの憤慨や、地域の出身部族のチームの試

合の観戦での模擬戦なども、本論で見てきたような国民意識や村意識の場合と同じように、なんらかのことが原因となって暴力に転化する可能性は否定できないだろう。

本論では、複数の帰属意識を持つことがありえることを示すとともに、その強度をサッカーをつうじての暴力の発動から検証しようと試みた。帰属意識の強度をこのことだけで論じられるとは考えないが、アジュクル人の国民意識と村意識の関係は、一方が強くなれば他方が衰退するような関係ではないとはいえると考ええる。

最後に、1999年秋以来コートジボアール西南部では入植しているブルキナ人に対しての外国人排斥が継続し、多数の死者がでていいるほか、数万人が移入地から本国へ帰還していることが報道されている。これは今後全国化し、93年にガーナ人にたいして始まった外国人迫害はコートジボアールに在住するすべての外国人にたいしてもおこるのであろうか。またそうなったときに、これまで移入民にたよって繁栄してきたコートジボアール経済がどうなるのか。アジュクルの村での調査を継続しつつ、同時に国内の状況にもさらに関心を向けていくしかないとの思いがする。

注

- (1) 国家・国民形成におけるセンサスの重要性については、アンダーソン [1997] を参照。
- (2) たとえば「アジュクル」という民族名を用いる代わりに「ダブの人びと」と居住地域の名を用いるなど。
- (3) 国籍条項の規定には血統主義によるものと生地主義によるもののふたつがあることからわかるように、「国民」とは「血」のつながりによるという考えがあることはいうまでもない。
- (4) 国民国家の代表とされるフランスにおける調査でも、国家よりも自分の住んでいる町や村に対する帰属意識の方が強いという結果が出ていることを、杉村が紹介している [杉村 1998:76]。
- (5) 民族集団が地域に根ざすだけのものではないのは無論であるが、本論ではこれを地縁的なものとして扱う。その理由には二点ある。a) もともとダブ郡の境界自体がアジュクル人の居住領域をもとに決められたものであるが、境界付近は人の手の及んでいない森が広がっていた。いくつかの村では歴史的に他民族との共住はあるとはいえ、隣接民族との地理的な隔絶が一定程度みられたといえる。b) 今日では多数を占める都市で生まれたアジュクル人も、すべて親の出身村に儀礼をとおして帰属することで自らのアジュクル性を確認している。特定の村に属そうとしないアジュクルの若者は非常にまれである。
- (6) A村で調べたかぎりでは、クラブ・チームが特定の地域ないし民族と結びついていることは認められない。
- (7) このことは阿久津昌三氏にご教示いただいた。
- (8) アビジャンの一つの地区名 (引用者注)。
- (9) *Fraternité Matin* 1993年11月4日
- (10) *IVOIRE'SOIR* 1993年11月3日
- (11) *Fraternité Matin* 1993年11月5日
- (12) *Fraternité Matin* 1993年11月5日
- (13) ガーナ人がコートジボアール人より優位にたてる可能性は、文化的領域にはあるかもしれない。コートジボアールのアカン系の人びとの起源伝説の多くには、祖先はガーナから移動してきたことが語られている。
- (14) なぜウフェ・ボアニ大統領の在任中のこの時点でナショナリズムが高まったのか、またどうして対象がブルキナ人でもなくマリ人でもなくガーナ人であったのかという、ふたつの疑問は残されたままである。一般には、コートジボアールのナショナリズムが激化したのは1993年12月のウフェ・ボアニの

死後、憲法規定により後継大統領についたベディエとウフェ・ボアニ時代の元首相ワタラとの政治的争いのなかでのこととされる。

- (15) 'Loukouass Akpl' (アジュクル語) は文字どおり訳せば「団結は良い」であり、皮肉にもこの選手権には村々の連帯や協調が掲げられていたことがわかる。
- (16) *IVOIRE' SOIR* 1994年9月20日
- (17) *IVOIRE' SOIR* 1994年9月20日
- (18) *Jeune Afrique* 1955号, 1998年6月30日
- (19) 『ジュン・アフリック』の同号では、カメルーンとともにモロッコの試合での問題も取りあげられている。

参考文献

Fraternité Matin

Ivoire' Soire

Jeune Afrique

- アンダーソン, B, 1997, 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』(増補版), 白石さや/白石隆(訳), NTT出版。= Benedict Anderson, 1991(1983), *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Revised Edition), London and New York: Verso.
- 今福龍太, 1997, 『スポーツの汀』, 紀伊国屋書店。
- 勝俣 誠, 1998, 「グローバル化時代のアフリカ民族国家——セネガル共和国の国家変質」, 『開発と民族問題』(岩波講座 開発と文化4), 岩波書店, 71~91ページ。
- Camacho, Martine, 1998, "Les oubliés du Nord", *Jeune Afrique* no.1940, pp.26-27.
- 後藤健生, 1995, 『サッカーの世紀』, 文藝春秋。
- 坂本邦彦, 1994, 「言語とスポーツ」, 寒川恒夫(編)『スポーツ文化論』, 杏林書院, 36~41ページ。
- 杉村昌昭, 1998, 「ナショナル・ポリティックスからコスモ・ポリティックスへ」, 『インパクション』106号, 63~76ページ。
- 多木浩二, 1995, 『スポーツを考える——身体・資本・ナショナリズム』, ちくま新書。
- 西川長夫, 1995, 『地球時代の民族=文化理論——脱「国民文化」のために』, 新曜社。
- 原口武彦, 1992, 「コートジボアールの国民意識形成と移民労働者」, 百瀬宏/小倉充夫(編), 『現代国家と移民労働者』, 有信堂高文社, 119~142ページ。
- Memel-Fotê, Harris, 1980, *Le système politique de Lodjoukrou: Une société lignagère à classes d'âge (Côte d'Ivoire)*, Paris: Présence africaine; Abidjan: Les Nouvelles Éditions Africaines.
- リーヴァー, J, 1996, 『サッカー狂の社会学——ブラジル社会とスポーツ』, 亀山佳明/西山けい子(訳), 世界思想社。= Janet Lever, 1983, *Soccer Madness*, Chicago: The University of Chicago Press.